

特54

64



市村座狂言筋書

中(番)目

三(番)目

御膳山御書紙
豊後野打秋

諸君御覧
おん紅

一冊
御覧

074748-001-0

特54-64

市村座狂言筋書

諸芸新聞社

M14-15

CEK-0004



○當る已五月在言 第一番目「御殿山櫻木双紙」 五幕

場劇 序幕花水橋川端の場○鎌倉殿中の場○二幕目

堀江正屋敷の場○三幕目三郎治浪宅の場○大詰丸の内

茶店の場○鎌倉山登城の場○扇ヶ谷學校の場

役劇 三間三郎次、進藤左司馬守(我童) 萩の奥方み

とを(國太郎) 熱田義助、萩衛門尉(新十郎) 東間千之助、

水野金太(我童) 萩江正富原國之助(時藏) 大和屋かひ

ら(しうか) 山形屋利右衛門、淵田伴五郎(市藏) 山形屋

下女お殿(松之助) 山形屋娘おくみ(田之助) 松浦小五郎

(高助) (此他の零す)

○序幕「花水橋の場」本舞臺向高き石垣懸通り浪の書

割上より枝垂の松同じく釣枝上手真向の櫓横けて製結床

右の方三尺の板羽目是へ金床と記したる腰障子を立掛内

に製結道具と並べ奇貼札大分有り軒並びに一間の茶店吹

貫雨襦袢子懸銅壺茶箆等など軒口に魚がしの團子提灯

紀の國と記した掛行燈床几を並べ下手に片蓋の火見櫓柳

の立木よて見切り總て橋際の様宜しく飾付け流行唄通

り神樂よて幕明ト床場又製結金太の(我童)好の拵へにて

職人形の(相中)の髪を結上鬘棒にて掛付けて居る並んで下

制三次の(相中)隠屋黒齋坊の(相中)の天窓を剃て居る茶

店の床几に町人形の(相中)髪を結上手拭で襟を拂ひ茶を

呑で居る側又銀香燭の少女の(子役)養盆を運んで居る曾

々宜敷有て(金太)ヤア一服お上んなさい升ト手を拭乍ら

其を付けて出す職人の(相中)イヤ此近所又随分流行床も有

が愛の床位はやる見世の有さい町人の(相中)さうさ第一

親方ハ仕事が出来世辭もよく男も宜りやア氣まへもよし

(職)又下制の剃刀ハ和かでお負よ隣の茶店の(町)愛敬者

のお村さんが茶を持て来るなどと云のハ江戸廣しども外

よ此様床ハ(職)町有りやア仕ねえ(當)モシ其様よお登な

すつちやアいけ升ん床を持やうな腕でも有升んがお客の

御最負で斯遣て居升のさト此様事を言て居ると側に(職)

夫ハ然と隣の村さんが見へねえが(少女)今浴湯へ参り

升た(町)時又親方昨日夜席へ往たら早ひものだ櫻田の一

件を引事に讀で居たせ(我)追々能讀物よ成ませう又其頃

よ高輪の八ッ山下で人殺が有つた彼所でも斬れたのと騒

々しい事でも有升たと傍に下制の三次隠居黒齋坊の天窓を

剃て居て斬たる思入血の出ると見て黒齋痛々と騒ぐ皆々

血留のあゝかど可笑味の演詞爰へ上手の櫓より箱を肩へ

掛脚半形膏藥醫九助の(市藏)長崎一流金齋肝凍瘡の妙藥

と呼乍ら出る皆々が能所へ來たと呼込(市)へい切疵

の膏藥私が貼て上ませうと貼る事黒齋價を拂ふ錢を取乍

ら此藥ハ神田皆小町漢法の醫家甲田宗育先生が發明の妙

藥を試しなさいと呼乍ら流行唄よて下手へ這入向ふより

富原國之助の(時藏)小荷を背負小間物屋の拵にて出る跡

より熱田義助の(新十郎)羽織袴大小で出て兩人行會見て

(時)思ひ寄すも熱田氏斯る姿で面會致し面目次第もムリ

ませぬと是にて兩人床几へ懸る茶店の小女茶を運ぶ(新)

イヤ富原氏斯町人となられても以前が出て商人といひ些受

合ませぬ(時)不潔用者も性來が出て成ませぬ(新)併し

櫻田已來其辭にト言掛け邊へ思入小女ハ手桶を提小間物

屋さん店を頼むと這入邊を伺ひ思入有て(時)熱田氏にハ

何れへお出と云(新)イヤ主人が役向係りし事あて心痛

の義有故觀音へ參詣致升る(時)シテ御心痛どの如何なる

事か(新)其仔細聞下されト合方に成り先年伊豆下田へ

亞船渡來已來横濱にて交易盛大なり拙者主人外國奉行

勤しが今般英人御殿山を借用仕たしと申出し右ハ御城

の咽首とも申す場所故主人遮つて斷りしを英人達と老

職へ願ひ出多分な貸渡しにも可爲由故主人が止め申を

聞入なき時の如何る變事有んも知ねハ何卒無事よ納る様

にと參附致し升る(時)何様織江様の御氣實御心中を察し

申す拙者進も御存知有通り水府の浪士櫻田事件の黨中よ

加のりし病中故其期に後れ残念至極尊王攘夷の志願ム

れば御主人織江正様へ御吹舉下さるまいか(新)其御心中

委細承知致したと兩人宜敷あつて熱田ハ上手へ這入わど

に富原思入有て(時)兎も角も追々異人蔓延て皇地を

穢すを捨置の歎かしいことぢやなアト扱態此時橋掛りよ

り以前の市藏出て見やり(市)ライ小間物屋さん何を考

へて居るのだ(時)ア、膏藥屋さん外でも無がハ前横濱

へも往なさるか(市)行共ハ繁花よ成て商ひが澤山出來

るから先半月ハ彼方で商ひを仕升のさ(時)ア、歡かしい

倍々異人が殖る故(市)何が歡かしい事があるもの日本

が開ぬぬから伶俐な異人が渡つて來て能事を教て呉るの

だ(時)大層異人の肩を持なと是より日本最負と異國ひの
きの争ひに成る爰へ茶店娘村の(まうか)出て争ひの中
へ這入止演詞皆々有て下手へ這入トバタ／＼成り橋よ
り巾着切忠次の(相中)類冠尻端折にて走出て向ふへ這入
と直に橋より山形屋娘組の(田之助)振袖形向く下女
賤の(松之助)能拵へよて早足に兩人出で(松)モシ／＼今
摘めが此方へハ参りませんかト聞く(清)と(下刺)が夫な
ら今向ふへ往た奴と此時向ふより羽織袴大小形三ツ間三
筋次の(我童)己前の拘の(相中)ト捕へ出て(童)コリヤ無
禮な奴身共々突當り如何致すと舞臺へ連來る拘の透を伺
ひ逃やうと云ふ思入下刺出て此奴で有うと云ゆぬ(童)何
やら取れしかト是にて羞うしき扱態有て(田)ハイアノ替
を取れ升たど云ので詮義をする忠次盗んだ替を一寸手
桶の中へ隠す仕種など有てト、件の替を見出されて(ス
リ)喰へ込だら夫迄よ鎌倉無宿の小雀忠次重い葛籠の凶
定も脊負て立れぬ盡斬れる者なら斬て見ろ(童)憎き一
言ト立懸るを止て(まう)何卒此場を御内閣(童)其方に
面じて見逃し申すト床凡へ懸る(スリ)姉さんお蔭で助り

升ト上手へ這入田之助松之助我童は替の戻りし禮を
云ふ此内我童の金と紙と包茶代を置こなし(童)御縁も有
は又重ねてト立上り袴の座ト拂ふト流行唄に成り上手へ
這入田之助跡を見送る本釣鐘に成り實と見送る扱態松之
助見やり思入有て(松)夫なら實娘の今のれ方に(田)アイ
なアト床凡へ懸るを道具替の知せ(松)の(田)の解懸る帯
を巻る流行唄よて廻る(同)同營中大廣間の場「本舞臺三方
折返し金襴彩色帯平舞臺上下杉戸総て營中大廣間の体上
手に上下形一本差にて進藤左司馬頭の(我童)立懸居る同
じ拵への秋織江正の(時藏)我童の袴の裾を捕へて居る見
得早舞よて道具納る」ト兩人扱態有て(時)開老暫くお待
下され(童)御用繁多の左司馬頭益なき論を聞耳持ぬ(時)
スリヤ何様有ても金龜山を異人へお貸渡の思召かト是
御許容有ての成ぬと云事種々有てお見合せ有やう御賢慮
願ふ(童)とハ又判故(時)皇國の耻辱を厭ふ故(童)何とト
張扇の合方よ成り又時藏が金龜山ハ今御殿山ト字して營
城間近き咽喉の要地なりト言筋を解(童)聞入ぬ扱態有て
(童)ヤア不容建言扣へ召れ(時)スリヤ斯程迄申すをお用

以無バト屹度思入有て差添に手を振るを見て(童)コリヤ
短慮功をなさずの著跡和田義盛が手本なるぞト時藏必付
き差添を袖よ掩ひ〇ト退致さうかト鳴物さつぱりと
成り時藏を尻目に見て上手へ這入跡屹度思入有て(時)
モウ是迄ト肩衣をはね立懸る此時下手より上下一本差で
萩右衛門尉の新十郎ツカ／＼と出て袖を捕へ留て無念を
忍べと云演詞渡り(新)權威も尋る今の振舞(時)利廣どの
れ察し下されト捕へられし袖を振拂ふを木がしらよて〇
無念にムるト下に居るをサヤミ序の舞時計の音よて兩人
扱態よろしく拍子裏

有ても上下のれ役柄でお差扣へ夫故表向ての御祝儀ハ
なさらす只神棚や御靈前の備物計り早くお上の能御沙汰
で御祝儀の仕直しが待るト此機筋の演詞六人にて有て
件の品々を持皆々奥へ這入直向ふより右の鳴物にて丸
島物の着附女中頭の拵ひれたらちの當三郎先は袴股立若徒
の新相中重箱文庫など服紗包仕たるを持付添出て舞臺
にて相中が朝早ふ出たれと門多故退ふ成たれ前御太義れ
包ハ爰へ置跡ハれた末の表へ渡して休息などよて若徒
編懸へ這入と己前の皆々出てオ、おさちどの早ふれ戻と
云ヤア殿様お引籠の事ゆえ御佛參も私が御名代で非常門
から通用して御一家方へも年始のお使ひ殊に右衛門尉様
のお官傳も有故急いだ故か暑やの／＼ト腰の扇を開き
ふく替々扇の番を見ておさちどのが遣ふ扇の番ハ氣
味の悪い血の付た人の首忘れ敷其扇ハ是ハ今日懸藩な
骨董家に有て珍しい故買て来たが是は十年も昔ハロキと
かベツカツコソとやら云異人が江戸海岸近く舶來したと
世の人が纏つて早く其異人の首をナモン断たら能らうと
扇ハ此番を描て商つたら大層賣たとの事其寶珠を目付た

〇同二幕目「萩邸館廣敷の場」本舞臺通し白木長押付釘隠
の金物正面左右折廻の平舞臺白地へ藍で三龜甲の紋散の
襖左右杉戸揚幕へも杉戸總て萩屋敷廣敷の体並中二階
三人腰元の拵へよて繰高へ盛ま備へ物を置茶道頓才の相
中近習侍士の新相中二人三寶へ餅其外の備物を扱ひ居る
見得鞠頭通神樂にて幕明ト皆々正月ハ正月だけ近所國も
手鞠頃此目出度よ引換て殿様ハ御遠慮中夫と云もお役
向の事よ付て殿中で老職の左司馬守様との紛糾殿様が理

〇同二幕目「萩邸館廣敷の場」本舞臺通し白木長押付釘隠
の金物正面左右折廻の平舞臺白地へ藍で三龜甲の紋散の
襖左右杉戸揚幕へも杉戸總て萩屋敷廣敷の体並中二階
三人腰元の拵へよて繰高へ盛ま備へ物を置茶道頓才の相
中近習侍士の新相中二人三寶へ餅其外の備物を扱ひ居る
見得鞠頭通神樂にて幕明ト皆々正月ハ正月だけ近所國も
手鞠頃此目出度よ引換て殿様ハ御遠慮中夫と云もお役
向の事よ付て殿中で老職の左司馬守様との紛糾殿様が理

くら買たが異人の首を取ど能仕占でいふんせぬう(茶
頓道才)左様聞ていよいよ吉相其代價の倍増も致すから愚
老に譲つて否々外に上やうと思ふ方があるやえよと皆々
種々演詞渡り争ひになる此己前より後へ上下形一本差に
て東間千之助の我當伺ひ居てすつと出て(當)誰彼と申さ
ず拙者が懇望致す其仔細の御主人御幽閉も異人より起り
ま事近來交易通信断止がたま横濱開けて貿易するも飽足
ば御殿山を借用せんとの義主君逃つてた斷り有えよ通辨
久須軒との應接に彼れが主君へ不禮の有條其御憤り止
時なく御幽閉を慰めんよの屈竟の扇の畫面(當三郎)私美
が心も同じ事御家來の各々方皆心証の其内も三間様が
仰られた獨言が耳に止り夫で求ふ此扇(當)スリヤ三間氏
の心を察しト是より頓才が申受たいと争ひよなる此時與
よて皆の者扣ぬうと云(皆々)アノお聲ハ奥方操機と琴唄
も成り褌衣裳好の形萩の奥方操の國太郎出る慶元女小
性舞其盆を持付添出て能所へ住ふ(當)異な事がか耳に
留り一同(皆々)恐縮 仕り升る(當)私は御用を承給り
方々と馳廻り戻つて未だ返事も申上げ扇よりの争ひで(

(國)今櫻越に委細の聞さちが持参の扇の畫は此程腹おは
れ怒強き折柄は斯様の物をお目に觸るば漸く少し減りし
御肝氣立んも計られねば取捨て仕舞や一へエイト思入氣
と換て(當三郎)オ、夫々御善提所と始めお里へも参り此
重の内はか移り又右衛門尉様へ上り升たら今日殿様お御
直談遊す事が有てお出との由左やう申せとの事(國)太義
で有た右衛門様がお出の事御前へ申し上やうお出が有れ
ば用事も有程些休息しや(當三)有難ふ存ト上後程お目
通り致升と與へ道入下手の杉戸より待侍士出て今日御一
家右衛門様お入の由御門の通行止り居れば御案内有可し
とのれ先觸でムリ升る(當)表御門ハ切故裏御門よりお
出迎ひの用意致せト(待侍)ハット引返し道入(國)御一案
のお出も此方の事案遊しての事運來の飾らば共費て
お熨斗の用意など(當)イザれ出迎ひの(皆々)用意致さん
(國)皆の者(當)先ね越有られませう琴唄皆々宜敷有て與
へ道入道具廻る〇同 奥殿居間の場「本舞臺常足の二重障
込馬塗樞上段の間の心正面上の方一間の床是へ跳へ
の軸と掛續て下手へ袋柵書柵書割銀襪とね込彩色番柵間

總て萩家廣座敷の休床の淨瑠璃にて與より操千之助腰元
附添出來り出迎右衛門尉好みの形にて近習附添後よりお
さち粗重を携へ近習保命酒を持出來り(右)打解し臺詞わ
つて禁足中の織江殿の心中お察しし聊の心を慰さめん
爲何事も取置て打寛ぎ一献酌んと存じ身共が持参のアノ
竹筒知行所より取寄し保命酒(さ)コレ御覽遊しませ御酒
御役の御用意も(操)我夫の事か案事遊し態々の御出嬉う
存じまする(干)此由殿へト是よて織江正出來り臺詞有て
(右)整居を悔む(織)團老とハ職務と家格の差別有ハ心外
ハ厭いねど行末日本の國辱となさば應祿賜る億川家帝土
へ對し不忠の汚名受給ハんと歎けしく因て吾一命の棄る
とも(右)ア、是ハえたり一命を捨るなとト宜しく慰め
て酒宴と成り(織)徳利へ目を付〇ム、器ハ何やら遠來の
(右)知行所より取寄之酒銘ハ則ち保命酒(保)命トナ(織
)ヤト思入(右)兎角ハ武士ハ命が大切酒ハ愁の玉帶ト思
入にて毒見をし〇心置なくお過しなされ(織)心能頂戴
致しお蔭を以て戀を散じ添けなら存じますト淨瑠璃有
て(右)引事の諫の長臺詞あり上るりの末(右)時計ハ最早

申の刻興に乗じ存外の長座時に家臣三間三郎次ハ此席へ
出ざるが如何致せしや(干)ハッ此存じ寄の義がござん
して(織)如何にも三郎次ハ心願筋有とて暇を乞他行致し
てござる(右)左様かと(干)へ扱態あつて「宜お傳くれよ
ト皆々(暇を告花道)行懸又立戻つて「幽閉の積鬱鬼角
心の養生が第一ト保命酒を引て宜敷意見の臺詞あつて双
方氣味合宜しく(織)に此世の名残といふ心息見合て木の
頭(兩人)御意得申すトキザミにて幕直ツナギにて引返
〇舞臺上手へ寄付根付の梨門上下網代城總て庭外の模様
此(頓)才以前の扇を持かさ引留て居る隣 邸の踊唄
々くよて幕明下(さ)私の扇を早う戻さんせ(頓)殿様が
御遠慮中正月とても寂寥閑處へ右衛門尉様がお持せの銘
酒其お流れで氣も浮々ト戻せ戻さぬと争ふ機會扇と梨
門の内へ入る(頓)サア、大事の扇を梨の内へ(さ)エッ
殿様のお居間の庭へ(頓)コリヤハよんな事をしたト可笑
の振あつて狂言の鳴物も成り追て道入跡をさせよて道具
廻る〇同「織江正居間の場」舞臺中脚の本線付柵間好の
透し正面上手床の間總て敷寄屋の体織江正立身よて件の

扇を見て居る(織)コリヤ過し年異船始めて渡來の頃以外
夷を思ひて書きた物と扇面を見やる千之助伺ひ出て「さ
ちが持参の扇先刻奥様より取棄よと御意有しが(織)イヤ
苦かぬ其方も見か(千)先刻一寸(織)オ、夫は幸ひト盡
面へ思入あつて十年餘攘夷の説を唱もれども交易盛よ成
り又金龜山を望も云諷諫せし言條通ふぬトム(千)よ
通辨(織)へ對して失敬を言たを相役三間が傍聞して口惜
く思ひ無念を晴さんと出て行たが未歸ふぬト主從臺詞
有て(織)千之助進めト是よて其方が父文之進の父伊
豆守へ仕へ汝は幼年より予よ仕へて陸日向なき其方故折
入て申付る所用が有がよも違背の致すまいトと佛壇の
間と掃除し切腹の準備とせよトいふ(千)是ばかりは有
路つく(織)予が意を叛くり(千)是非よ及ばぬト這入跡織
江正建白書と白鞘の短刀と扇を一緒よ包む與より操服臺
を侍女よ持せ出來り(操)佛間へ御禮拜遊すと聞御服上下
持参致ました(織)手前が勝手よ致すト歸よて打返すと白
小袖水上下の顯られるを見て(織)コリヤ白無垢よ水上下
(操)死出の旅路のお仕度なれを責て我身が召替(織)ス

リヤ我心体を察せしか(操)承給はりましたト宜しく臺詞
渡り(操)妾も共よ(織)若佛間へ來りなばト叱る兩人宜し
く扱態時の鐘床のメリヤスよて道具廻る○同腰越口烏啼
の場(舞臺)向滑川を隔たる景色樹木の繁み寺の屋根五重
の塔の書割上手石垣よ竹矢來下手植込の松灯入の満月を
仰し道具止ると三間三郎次袴高股立大小形是を仲間二人
引立出來て存分立廻つて二人の進て這入跡見送(三)殿へ
不禮のピンステケン其恨を晴さんと暇を願ひ晝夜と分たず
ト宜しく言ふ風の音よて烏啼くを氣よ懸る以前仲間出て
一人懸るをよ上る(仲)ア、死々息が止た(間)此奴の死た
南無阿彌陀佛(三)エ、氣よ懸る辻筈だト一人を投る事
よて道具廻る○同佛間佛間の場(舞臺)通し常脚白木造上
手よ佛間へ燈明を照し此前經机へ建白書を載真中よ疊
を裏返し白布を布織江正白小袖水上下よて住以道具納る
(織)佛間よ向ひ利源祖先尊靈へ誦んで進奉るト異人渡來
し國法亂れんを歎き閑老忠信を諫れ其日前の榮利よ迷ひ
諫を容す死よて諫るといふ床の淨るりよて種々臺詞わ
り水釣鉤を打込思入有て(織)今の知死期ト扇を見遣三郎

次も眞此如くと殘惜よ扱態ト、短刀を突立る是よて向
、三郎次麻上下の紐を結ながら出來り(三)御前様には
御生害(織)オ、三郎次か能く戻りた近うト是にて(一
三)舞臺へ來て前の筋をいふ(織)忠義厚き其方ト建白書
と遺言書を渡バ(三)見て具よ承知奉つるト御一家右衛
門尉様お入有しが(織)予が生害致すべきと引事舉ての意
見あれども(三)臣等一同申し合せ即日申上へ申達し有無よ
仍ての閑老始めト扇を披き眞此通り首となしト見せる(一
織)(三)臺詞宜しく(三)君暫く愚臣が願ひト奥方始め
家臣へ目通し願ふ(織)許して操上手より千之助始め下手
より出來り皆々臺詞あつて(織)奥操子が詞を背かず健氣
な心誠武士の妻なるヲコリヤ臣下の者委細ハ次よて聞つ
んが三郎次が下知と受建白書を上へ捧よト操よも遺言
し是よて思ひ置事なしト引廻し笛を掻切る(操)健氣な御
最期(三)頼て苦々御存念を(皆々)達し申さんト愁ひ三重
にて宜敷幕

○三幕目笹目谷裏家の場(舞臺)本舞臺常脚上手反古張障子此
隣の中二階を見せ此間垣と葉戸よて見切下手板扉都て
借家の体技よ家主女房お慾藥を煎して居合長屋の佐次兵
衛太助見舞よ來て居稽古唄通神樂にて幕明く(悠)急しい
よ度々見舞よ來どは深切な事(兩人)イヤか家主の御夫婦
が肩よ入て世話をさつしやるト夫に此方の息子よのが親
孝行で(悠)如何も感心ゆゑ世話をするト是より元は武家
で長崎奉行をお勤の萩織江正様の御家來ト此筋といひ父
子を憐む臺詞有る此へ隣の山形屋の手代半助魚籠を持上
手より出來り只今到來まましたか御病人の御見舞よ上
ますと主人の言付け(悠)モ、若旦那ト呼奥より三郎
次若流浪人形にて出來り(三)何魚夫ハ間違でござら
(半)イエ御病人へ御見舞に(三)夫ハ痛入ハ事併し親子二
人の中へ結構な魚頂戴致してハトお慾可笑みの臺詞わ
つて、魚を貰つて這入跡思入あつて(三)世も人鬼ハな
い者ぢやト藥の齧れるのに心付き臺詞ある爰へ上手の障
子を明甲田宗育醫者形にて出來り(宗)見舞の乗は戻ら
たかト臺詞有て主人の死後深き望の有うといふを(三)ハ
町人に成て暮たいといふ故ムツとして這入此時上手葉戸
の内に家主太郎兵衛伺ひ居てホツと思入有て内へ入(太)

此家主安堵といふ者ぢや(三)何時の間に吃驚ける是にて(太)の地主の娘を是非とも嫁ひ貰へ先頃の魚の内祝言と進るお慾以前の鯛を焼て燗徳利を持出来り無理進に進る橋懸より山形屋理右衛門羽織着流老たる拵へお組振袖娘形下女お膳編の着付以前の半助角樽を持付添出て内へ遣入(理)太師兵衛殿御苦勞で御座た(太)是れお早いサア(此方) (慾)花嫁様の私が案内ト(組)を(三)の次へ住せる(賤)お日柄も宜お愛度ござり升ト角樽を出(三)家主を呼語が有毎に斷つた嫁入ト詰るを聞て(理)の變替での有さいトいふを(太)紛して(理)を(三)に引合せる(三)ヤ其義ト困る(理)不思儀な御縁で娘をお賞ひ下されバお互に御身以前由ある御身分乍ら不慮の事よて御浪人イヤ又其時節も御座る者お人柄といふ御孝心に娘も總ての事ト臺詞有て懐中より目録を出し「差付乍ら上代些少ながらお納下され(三)イヤ此取結び此方より願つても致たいが心願有て一兩年の成難いト判然いふを父女ハ兩三年過ても厭いぬと結納を渡す太郎兵衛お慾半助など可笑みの振有て(理)斯取究た上月日の立を樂みに

(賤)お様様貴君へ御挨拶成れませ(組)お詞に偽りなければ假令二年が三年でもお待申して居ませる何卒お見捨成れいで(三)夫婦ハ二世と申すかゝり尽未來まで夫婦でござるぞ(理)オ、能言て下さりませ(組)お様様お婿ふござりませ(理)目出度祝して開きませ(組)心残りの演態あつて遣入跡太郎兵衛お慾可笑み有て同トく遣入是より床の淨瑠璃に成(三)邊を片付「思ひぬ事にて親人へ藥上るが暹ろ成た一間の内今乃容子を聞有たが夫共御寢なつてか何にせよ此目録の如何した物ぢやト是よて障子の内より悴々と呼(三)お目覺でござりませるト障子を開る三太夫切繼浪人形老たる病人にて布團に座り居る(三)幸ひお藥も暖めましと藥を出し飲事あつて(三太)孝行を喜ぶ臺詞ある(三)早う御快氣を祈居ます(三太)イヤ最前一寸寐耳も聞たが能も富家の娘の縁談を斷りしハ天晴ぞト壯年故色に迷ふかと思つたが宜魂魄と種々臺詞渡る唄にて熱田義助東間千之助出て花道にて斯る裏家でハ密談が漏れせぬト詞の末門口へ來り(千)三間氏御在宅で御座るかト戸を明る(三)見て一是ハ御兩所と通

是にて合方に成兩人(三太)の容體を尋ねなせしてド、病人ハ遣入臺詞あつて(三)ヤ密談とハトいふ兩人邊へ扱態あつて御親父の御病中ゆゑと扣へが兼て貫殿を棟梁と頼んだ一義明十五日の上元の登城路次に待受討果さんと決心したの棟梁の了簡ハトいふ此時中二階に(理)伺ひ居る(三)思ハ見合しハッといふ思入あつて氣を替一折角の事乍ら拙者の黨中をお除き下され(兩)スリヤ御親父が御病氣故に(三)急に命が惜く成り臨機の時の變心と疾より覺期致し居るト思入あつていふ(兩)本心で言る、かト主家の重役あつて殿御切腹の時も御遺言を受繼御無念を晴す統領が今の詞と宜しく有て夫でも思ハ忘れぬトト立上るを(三太)出て御兩所暫くと止御挨拶の夕刻までト、兩人ハ向へ遣入(三太)コリヤ悴夫へ出いト合方さつはりと成て「其方の何故兩人へ彼様な意外の事を申せしぞ親子の中遠慮のない打明て聞せて呉ト種々あつて(三)全く命活延ばり町人となり生涯樂をする氣でござる(三太)スリヤ隣家の娘の色香に迷ふて武士の元魂廻りしか(三)仰の如く色故曇し武士の元魂御覽成れて下さりませ

(三太)ナニ魂を見するぞハ(三)只今お見申し升ト刀を取出し抜刀を目先へ差付る(三太)ム、身に一點の曇なく麻刃を合せ有かハ(三)刃に映る人影のナ他聞を憚る未練な性根(三太)借ハト思入「ア、良魂魄イヤサ腐しよナト兩人宜敷思入障子の内へ入る時の鐘にて淵田伴五郎割羽織袴高黒頭巾にて出來り花道にて(伴)心得難き三間の心底ト時宜に依は親子どもトいふ臺詞有て門口へ來り尋る(三)奥より行燈を提出來り宜敷有て(伴)拙者でござるト頭巾を取は入(三)淵田氏カト双方臺詞あり(伴)貫殿の御本心拙者に聞せ下させ(三)何本心とハト合方に成り(伴)ハ深き思慮が有か本心カト詰寄る思入有て(三)如何も御兩所へ申せし通り町家へ交り氣樂な暮を致して見と武士の魂い入替り命が惜く成ました(伴)全く夫に相違ないナ(三)虚言の申さぬ(伴)スリヤ彌々(三)ハアくぞいト是にて(伴)生ての置れぬト肌を脱白禪にて斬て蒐る(三)有合臺所道具で受「黨中なれども他家の浪士其腕前を知ざりしが壯年乍天晴れ御手練伴(何)をト宣しく立廻るを以前理右衛門出て止書紙く見せ他言せぬといふ是にて兩

人刃を止め音々盗詞有て(三)誠心底耳打なさんと思ひしがト伴五郎の當家中でない故態と腕前を試したといひト、手箱より同志趣意書を出て見せる(伴)天晴れ名文ト譽る是にて以前の千之助義助出で先の粗忽を詫る(三太)刃を扱に出来り賤別せんとて腹を切うとするを(理)止て舅と親の中ゆへと無理お止る○後に厄拂ひの聲。十四日午越の御祝儀に御厄拂ましよ厄落ト是を聞(三)何様今日は年越お翌の日頃の望を達し(伴)悪魔を拂ふ厄落し(千)鬼打豆の西の海(義)騒立波も穏かか(三太)願ふ時節の尊王攘夷(理)福茶替りに御酒一献ト是よてお賤餅干盃蓋を持来り(理)錚殿一献と献すを受る此時中二階にお組出嬉しき扱態盃蓋をお賤に持せて遣る皆々心附て(伴)情の妹背の(千、義)語々ひを(理)是が娘の心ゆりせ(三太)只跡々の(眞)理)眞が引受て(伴)イサ(是より千、義)旅宿まで(理)夫な直様會合に(三太)心残さず働させ(三)ハツト身仕度して親子別の愁歎宜敷三人門口へ出る二階よれ組飲仕舞ワツト漣仗三重本釣鐘よて幕を引付扱態あつて(三)各々方待達よとさつた(伴)イサお先へ(三)先々

と通神樂よて向へ這入跡留木にてセヤギリ
 ○四幕目大詰城外土手下の場「本舞臺正面土手上へ松の張物真中後賣茶屋時の大鼓よて幕明ト紺看板の仲間酒を飲捨盗詞にて上手へは入向より星野政藏と磯谷忠藏出て和田の事件以還用心が厳いといふ盗詞有て床几へ懸(忠)の虚病を遣ひ茶屋博士を通町の須原屋迄藥買に遣り爰へ三郎次伴五郎國之助千之助思ひの拵へにて出来り盗詞渡る風音にて整の字の記た切爪来るを(三)短筒にて打止る(國)胡違けぬ合圖の一發ト此時(千)落来る爪を取上見て「文字ハ即ち整とあり(伴)訓の整ふ事に取ての(皆)是吉兆(國)事の手始ト爪を引裂打付るを知らせにてナン廻す○同鎌倉山登城の場「舞臺正面上の方城門下手石垣樹木の茂り都て坂下口門外の体行列三重にて向よ長棒の乘興發衛供廻り大勢付添来るハツ(は)にて以前の皆々拔刀を持出来り我々輩ハ萩の家臣ト詰寄ド、早きぞん(の鳴物にて立廻る内(三)刃を駕へ突込供廻り駕を門内へ昇入れ二手よ成て三人追て入直取て返し一本望遠くれしか(三)體に深傷ハ負せしが(國)残念ながら(三人)討滅さ

れしか是よて門より一人顯れ「藝固の面々殿にハ別進ござゆねどト是を聞(三)ぬふ相手の閉老が(國)存命也ト聞上り(皆)最早是迄ト刺透へる内供廻り(伊)に懸るを追ては入と同時に廻る○同扇ヶ谷學校の場「舞臺中脚の玄關正面大形の額左右高張時の鐘風の音にて道具治るト書生二人居て一人が坂下の噂をして万一爰へも狼藉者をとといふ内以前の伴五郎血刃を提出来るを見て狼藉者と恐れ心付て白刃を後へ隠し(伴)拙者ハ淵田伴五郎と申す者松浦殿お御目通を願ふといふ書生拒む内松浦小五郎参るで有ラト繼上下にて出る盗詞有て(伴)の閉老を討滅せし筋をいふ(小)ハ何なり共申し置れよトいふ是にて(伴)ハ同志趣意書を出す(小)取て讀一貫に尤もなるハ文小五郎礎と落手致した○猶盗詞有て(伴)ハ切腹する(小)虎皇國の爲に成べき壯士惜さ一命棄させしハト是にて(伴)ハ苦痛を堪へ「梅と共に開きし野邊の魁は散ても花の匂残り(小)ソレ書留いと書生書留る(小)ハテ勇しきト衣紋を正びき木の頭(伴)ハ咽喉を突がつくりと成る「最期ぢやなアト時の太鼓時計の音よて宜敷拍子幕



是より中幕と申所なれば筋は誰様も御承知の狂言也
 余餘興の挿書で役割共御覽に入れ名題場割文を左に
 ○同 中幕「戀女房染分手綱」番掛村の場、双六の場

○同 第二番目「盛系好比翼新形」 四幕

役割 ○品川樓主人 莊吉、初代盛系 高助 ○八木豊永
 我童 ○沼田大盡 山木文平 時藏 ○豐永眞八 木豊之進
 市藏 ○品川樓娼妓 玉藻後二 二代目盛系 田之助
 ○豐永女房 お敬 國太郎 ○茶屋西の宮内儀 まうか
 ○盛系新造お米 松之助 (此他略す)

○本舞臺一面の平舞臺真中に西洋風の入口上手に瓦斯燈
 を立て左右白壁の堀内に西洋風の二階建て品川樓表掛り
 の体懸唄にて幕明く後に聲色使二人と豊永が抱への人力
 挽(善八)と喧嘩をして居る鍋焼温飴屋是を止て中を直し
 聲色使と温飴屋の上下へ別入ると車夫の車を挽乍ら花道
 へ掛る向ふより八木豊之進散髪羽織着流しにて出来り車
 夫と行違ふて(進)ヤ善八でり無かト是にて屹驚足早に向
 ふへ入る(進)跡見送り借ハ養子豊永ハ品川樓に居ると見
 るが逢度ものトいふ時沼田の文平、田五平、源十の田舎客

茶屋女と出て捨置詞あり正面へ入る跡に豊之進獨り思入
 るる爰へ以前の聲色使出て、一枚買て下さいト勸めるを
 突退け(進)ふいと向ふへ入る跡、呆れて銅羅を打ち又チ
 ヨンと拍子木を打を即ち道具替りの知せにてふん廻す

○同「二階廣間の場」ぶたい 西洋風都て品川樓廣間の体懸
 唄で道具止るト爰に以前の文平外二人の田舎客茶屋女等
 居る橋掛りより娼妓小式部長山しかけ形にて出る若い者
 喜助が滑稽の引付有て此時(文)敵妓盛系を呼といふ所へ
 下手遣手部屋より遣手お元出て来るト(文)が盛系の身受
 の周旋を頼むを(元)盛系にハ豊永といふ情夫が有から夫
 より横濱の神風樓から来た玉藻にしるを諫る是よて(文)
 成程と感心し纏頭を褒美にと出すを(元)受納めてサアお
 座敷へ皆々共々下手へ入る跡へ以前の豊の進ハ茶屋女
 出るト爰へ娼妓玉藻出て若い者佐助を呼(進)の偶妓も出
 きてと頼む(佐)不審乍ら引付する事有て夫より(玉)が座
 敷を明ると言と(佐)借ハ初買惚と見るといふ其時(進)玉
 藻の名を聞き矢張九尾の狐かと九字を切る摸機宜く廻る
 ○同「盛系部屋の場」平舞臺正面一間の床一間の夜具棚此

下廊下の片遠見真中は屏風建廻一ある時の鐘にて道具止
 る爰へ新造お米出てモシ上頭と呼ふ是にて屏風の内より
 盛系床着しゆけなき形で出る是より端歌の合方になり
 (米)沼田が是非身受をすると腹を立て居ると密語く(盛)
 常威の思入此時又屏風の内から豊永散髪麻問着形で出て
 其沼田とやらに身請をされると言を盛系が恨む側からか
 米も其様事ハないといふ是よて(豊)思入有て夫でハ僕と
 添添る氣か(盛)知れた事と是より心變りのせぬ由の密詞
 宜敷有て(米)ドレ沼田さんハ言解を、立掛るを、ハ、ハ夫
 よハ及ぬト文平出る是よて豊永ハ屏風の中へ入らうとす
 るを止て是より替つた合方になり(文)私ハ上州沼田在の
 山木文平と申す者と町噂に挨拶し夫より又生系の事度度
 ヲ山京中盛系とも去年春以來馴染ある内不圖古郷の便覽
 といふ本で其本籍を見ると十年跡ハ大恩受し人の娘で有
 たと知たればこそ身受もせんと思ふた處豊永といふ者有
 を聞先安心した由を語り何卒此未共上頭を見捨ぬ様にト
 聞て皆々驚く中にも盛系ハ是迄粗器としたを謝豊永ハ兎
 も角一寸一杯ハ言を(文)辭退する事有て下手へ入る跡に

思入有て(盛)沼田さんに對しても添添ねば活てハ居られ
 ぬといふ(豊)うりや僕連も同じ事假令妻子を捨れば連
 (盛)エ、貴君ハ妻子が(豊)やどギツクリ氣を替「何サ人
 に才子だと言れたを捨ても一生添ふ心だと消消此時廊
 下口より豊之進出て伺ハ居ると思ハず見てヤ(貴)君ハト
 屹驚するを合點行ぬこなし(盛)モシ貴君とハエ(豊)ハテ
 能似た人もと豊永居直つてまやんと成るを木の頭一ある
 者ぢやなアト此摸機宜しく拍子幕

○二幕目「八木宅の場」本舞臺三間常脚の二重上手一間の
 障子正面床の間此外建仁寺垣より見越の松門口へ八木豊
 永武と札を掲總て本所八木町宅の体爰ハ金貸金兵衛散髪
 羽織着流しにて立懸り興へ行くとするを前垂懸の下女ハ竹
 留て居る合方に殿治屋の桃の音を冠せて幕明と(金)豊永
 に逢と下女を突退興へ行くとするを興よりお敵人柄よき
 着付にて出来り大層お早く入ッまやいました(金)何時來
 てもお留主ゆえ麻込へ押懸談判まやうと提灯掛の辨式の
 積で來のちや(敵)御同役の突合で三時頃から遊歩ハ行夫
 から何へ参ッたやら出先の程も(金)ハ、借は今日へ押流

りて待受て催促するといふ(敬)其義もお前様にお頼が御座り升(金)シテ御頼と(敬)何をお隠すませうと是より其夫の品川様の盛系に厚く成子供等の末が案じられて夜の目も寐られず何卒異見をして呉と云(金)のか竹も可成り有て向へ還入(敬)の跡又思入此、奥より豊吉豊松の子役兩人目を摩々出来り(吉)母上様お早うムリ升(敬)二人共手水を遣ました(敬)御飯も咽喉へ通らぬわいのウと叫ぶ飯が垂ままた(敬)御飯も咽喉へ通らぬわいのウと叫ぶ成奥へ入是より床の淨るりに成向より前幕の豊之進情々として出来り花道にて(豊)聲が不良風説又何な物かと老の身で夫となく上る二階の別世界彼では聲が迷ふ等十門口、来る(敬)父上様で御在まするかテモアお早い今日何方へお出で御座りました(豊)柳枯の妙見へ願參を致した孫も變いなか(敬)仕合と達者で只今奥で御飯を喰て居ます實父も定て御飯前(豊)昨夜うら胸病で飯杯の欲くない○シテ御殿の如何せし(敬)御役所へト言を(豊)の答て日曜休職ならん(敬)御同役のお迎も野がけト勃す奥より(吉、松)出挨拶する(豊)斯様女子も有中を

ト始終こなし(吉、松)給事する淨るりよて八木豊永足早に出来り(永)世に似た人の有どの云とト身の放好を案じて別が行へせぬかと門の下駄を見て跡へ引返さうとして行合(三郎治)夫へ參られし(豊)永(君)同役の二葉君早朝は何へ(三郎治)局長より内命受君の處へ(永)何の格別元々宅へと内へ入(三)上手に住ひ(三)近頃御氣の毒にハハ得共今日より免職との義で御座る(永)ナ 今日より免職とナ(三)サ、此程噂に聞及ぶ彼青樓のお馴染ゆゑト改いせバ推察するといふ(永)面目なきこさし(三)然ば是よてお暇申さんト立歸る(永)ハ思入有て○然ちや(三)と行懸るを(敬)出て礎と止○血相變て何へお出成れま(永)お敬どの面目ない、猶も出様と争ふ(豊)イヤ其心配よハ及びませぬト孫を運出来り(豊)コレ聲殿何も左様よ面目ない事ハないト改心して呉と所存を問(敬)今父上の仰やる通りト馴染を語る(吉、松)モウ、父上様今日何方へもお出成らずお内へ居て晩から坊と一緒にお休下されまし(永)オ、案じるな今日より父ハ改心致せし(敬)コリヤお絶念下され升るかト双方詞渡り(豊)世の

謎もア如く過つて改むるに憚るなし御身の所存が改まれば我も於ても身の大慶(永)ヤアトこさし(豊)行いでも清遊所通ひ必ず思止つて下さいト此内下男迎ひよ来り大目那も吉原通ひかト言懸るを(敬)目顔で知す(永)イエ昨夜限又夜泊の致ませぬ(豊)我も昨夜舊友の宅へ泊ト宜敷あつて橋懸へ入る皆々鳥渡臺詞有て(永)牛の御前へ參詣せんト(吉、松)を連て橋懸へ還入跡より若い者門口へ来り仲の町の西の宮から来ト手紙を渡して歸る(敬)八木君へ山木文平より○此裏書ハ男の手跡ト開き見て(敬)ム、夫なら盛系と夫婦約束成れしか擧う途で頼んで見やうト身仕度する(竹)出て何やら賣方の御容子が(敬)何分留主を頼んだぞやト向へ還入橋懸より以前の豊永子役を連出來り(永)お敬今戻しぞト皆々内へ入(吉)母様何へお出なりしや(竹)途中迄お迎へ(永)道ハ一筋行進ふべき所いなしト思入あつて以前の文を取上(水)儲は是故疑念を生じ彼所へ獨參りしならんコリヤ斯してハ居られぬわいト行懸るを子役止る此へ以前の金兵衛出て催促し、引立んと手を取を(永)ハテ理不盡なト拂ふを木の頭にて道具廻

る○同仲の問茶屋の場「舞臺三間中足の二重下の方に西の宮といふ暖簾總て仲の問茶屋店懸の体若い者小助茶屋女お福掃除をして居騒ぎ唄にて道具止るト兩人障子の内へ這入向よりお敬申乗出来り(敬)小梅くら參ましたが盛系さんといふ上頭に逢せて呉ト頼み車屋を返す女房おたい出で彼方様で御座り升る(敬)ハハ先刻御手紙ゆゑ參りました者で御在ますト上へ住ひ名乗とあつて盛系に逢せて呉と頼む上手障子の内にて妾がお目に懸ませうト盛系出来る(敬)夫ならお前が盛系さんでござんすか(盛)お目も懸るも恥かしいト八木ハ女房子がないし今迄騙されて居たト俯向(敬)然した譯どの知ぬ故今日の御文を見よ付深い中ぢやと知たゆゑト免職の事を言異見を頼む(盛)ハ夫と知たら二世と報ぬト恨む(敬)夫なら頼を聞分て思切て下さるか(盛)夫ハ得心致しましたが何ぞ彼方のお情で豊永さん今一度お逢せ成れて下されませト兩人宜敷こなし爰へ前幕の文半羽織着流して出来り(文)拙者が手紙を出した本人ト穩かよ濟て呉ト思入よていふ(盛)イエ、何でも八木さんに(文)ハテ何事も此の店先(敬)と

の言宅よも子供が大方案に居ませう早くか暇(盛)夫なら
彼方御迷惑でも(敬)テモ案じられた事ぢやナアト此時以
前の車夫手紙を持来り渡す(敬)妾を始め沼田様然系との
とした手紙(盛)何やら客子の有さうな(文)八木氏の末跡
へ残つてお出なさるか(車)イエ、夫成お別れやまな
(盛)案じられる此文ト三人封を開き(盛)敬)コリヤ書置
ヤ、と言懸る(文)押へて(支)追すと跡をト兩人を
下へ居させる此模様宜敷拍子幕

○同三幕目品川樓情死の場「舞臺序幕盛系座敷の道具棚
風立廻りあり火鉢の脇にお米糞を煎ぎて居る華車お元小式
部長山部屋着にて下手へ住み端唄よて幕明し鈴々見舞の
臺詞あつて下手へ這入跡床の淨瑠璃は成お米が屏風を明
て起す是にて盛系麻衣にて起上り臺詞あつて(盛)夫に付
ても世の中の義理程辛い身はないト是より豊永が身の上
の事宜しく臺詞渡り(米)夫はさうとお藥が醒ぬ内上りま
せぬか(盛)御丹精のね御頂だいて仕まはうわいなアト飲
事あつて(米)ホンニ生憎れ口直しの御菓子か切て居まし
た(盛)引過ゆゑト止る(米)の行で御座り升ト其函よ

り札を出(米)何の間よやら此札カ(盛)何ぞして居るかえ
(米)イエ破れても通開わいおアト思入あつて下手へ這入
る(盛)他人と雖も彼様な實意の人はないわいおアト合
方よ成人と思へば思はるゝと豊永の恨を言ソリヤ餘り
ござんすわいなアト泣下手障子を明て豊永高帽子マハ
よて出来り(米)上頭其言分をいひに來ました(盛)然いふ
彼方は(永)アコレト押へ帽子を取四方へこなしあつて
(盛)何して彼方の此二階へ隠れてお上りなさいました(永)
イヤモ此間の事件よハ死うと覺期を極めしも和女の
文の返事と云ひアノ深切お文平殿の異見に付て死を止ま
りト茶屋の手前を兼て外から來る身と言譯する爲と是
より深切を變待に免職と知つ、通ひ妻子のあるのを包み
隠して二世迄揺つたが見棄る心ハ毛頭ない死ると言はは
氣を引爲と一筋に逆て呉といふ(盛)ハ死氣に成て居たけ
れども迷る解にハ行ぬといふ(永)スリヤ彼端々(盛)ハイ
義理を捨ては濟ませぬわいなアと判ばりいふ(永)思入あ
つて立上るを(盛)留めて○ア、モ、待て下さませ(永)
イヤ愛僧の盡た僕なればモウ用柄はない苦ぢや(盛)異見

好み音楽にて道具留るトはた、よて橋懸より善孝善次
尻端折にて番組と持出來り可笑の立廻り此へ前幕の沼田
文平小式部長山仕掛形にて付流出て(文)二代目盛系と
改名した玉藻さんの座敷開きよ來たと是より臺詞渡つ
て亭主吉着流二代目盛系阿彌陀の袴着よて出來り(莊)
百之助改名由次郎御目見の口上と違(文)淨瑠璃名代大夫
連名を讀懸明にて幕を引付ツナギ道具出來次郎引返す
○同四幕目淨心寺比賣の場「平舞臺真中草提正面比賣
細砂障子と建懸て幕場の体仕出比賣の筋と首向へ這
入向より前幕の豊吉先へお敬頭巾形にて出是と同じく東
陽幕より豊吉持形にて後より豊之進出來り花道にて双方
見ひくの臺詞あつて舞臺へ來舞りの前にて落合(豊)今
日吉原の連中とやらが参由(敬)顔合する取まて戻つ
た時分と押針(豊)二人の子供を一人宛(敬)別て墓参りに
参りし(豊)塔坡を讀下し○南無豊由輪念僧士心柄と
言なすら、回向として讀のこなし(敬)恨しいは盛系との
彼程までにお願申せしたナセ此様な事をぞて口説(盛)夫
は愚痴と申すものと懸りて回向せよといふ(敬)イエ、

する(永)言拂つて懐中より白翰の短刀を出し見せる(盛)
其お心なら此二階で(永)アノ情死を(盛)アモント押へ
兩人四方へこなし有て(盛)彼方計か私も死なうと覺期を
致しましたハト文平の深切を無よして妻子のある彼方を
歎したと思ひれるのが口惜から彼世で逢たいといふ(永)
併し夫ゆゑ兼てよりト宜しく双方へ臺詞渡り(盛)何の因
果で此様に彼方お懸しいもの成り(永)世も懸縁の契はど
思切るよも切れぬといふ(盛)其身を果す御羽子(永)放れ難
なる爲煮の(盛)血汐を絞る愛思ひ(永)人目に懸らぬ其内
に(盛)本よお米が歸らぬ内(永)早く支度を(用人)さうぢ
や、ト是より下座の獨吟よ成兩人別れの水を飲むなど
宜しく此時人音するゆゑ(永)腹やら此へ來客子(盛)見付
られてハ大事の前(永)然らハ盛系覺期のよいう(盛)少も
末練の御さんせぬ(永)苦痛を堪えて死で呉やれト獨吟
の獨にて豊永盛系へ白刃を付る知せて二人の體を大せ
り下座にて道具居所よ替る○舞臺一面に打返し二代目
盛系座敷の模様遣の棟後戸欄連細に阿彌陀の厨子床の間
よ淨瑠璃の鏡の掛地左右本欄の柱懸し總て佛めいたる

好み音楽にて道具留るトはた、よて橋懸より善孝善次
尻端折にて番組と持出來り可笑の立廻り此へ前幕の沼田
文平小式部長山仕掛形にて付流出て(文)二代目盛系と
改名した玉藻さんの座敷開きよ來たと是より臺詞渡つ
て亭主吉着流二代目盛系阿彌陀の袴着よて出來り(莊)
百之助改名由次郎御目見の口上と違(文)淨瑠璃名代大夫
連名を讀懸明にて幕を引付ツナギ道具出來次郎引返す
○同四幕目淨心寺比賣の場「平舞臺真中草提正面比賣
細砂障子と建懸て幕場の体仕出比賣の筋と首向へ這
入向より前幕の豊吉先へお敬頭巾形にて出是と同じく東
陽幕より豊吉持形にて後より豊之進出來り花道にて双方
見ひくの臺詞あつて舞臺へ來舞りの前にて落合(豊)今
日吉原の連中とやらが参由(敬)顔合する取まて戻つ
た時分と押針(豊)二人の子供を一人宛(敬)別て墓参りに
参りし(豊)塔坡を讀下し○南無豊由輪念僧士心柄と
言なすら、回向として讀のこなし(敬)恨しいは盛系との
彼程までにお願申せしたナセ此様な事をぞて口説(盛)夫
は愚痴と申すものと懸りて回向せよといふ(敬)イエ、

女子の回向ヲ致しませぬト石碑又向以〇死程思ふ感涙と
 のど比翼塚に建られて嗚咽婦お御さりませうがト口説よ
 成皆々怒のこなし(吉)父上様情死を成れた計りて第ど
 二人學校へ参ましても傍觀の生徒に悪く言れ(櫻)何でも
 位で(兩人)戻りまする(敬)何の因果で彼様を悪い人が
 色情にお迷成れた事ぢややら(豊)夫が所願無し可成
 られて運の盡(敬)川崎点の悪口も纏れて歸る機は
 (豊)ハハよく言たものぢやナア〇宜しく運のこなし此時
 向にて人音する故生垣の影へ忍辱向よも運の文字書
 宮女房續いて盛糸の弟藤吉出来り(藤)文平も運を閉
 く蓋詞被て舞臺へ来り花など上る事あつて(文)此子は死
 だ上頭にも容が似て居ぜ(女)お前は若や上頭の(藤)ハ
 藤吉と申す實の弟で御座ませト宜しく名乗(文)お後が煩
 つて居との事(藤)姉さんが無分別でト煩ひ付て今の貴
 を話す(文)可哀さうだといふ思入にて懐中より五十圓取
 出見舞に遣る(藤)イエ其機な大金をお貸して歸ります
 迷感せなね成ませぬ(文)成程五十圓といふ金を只貸つ
 てハト亡父藤兵衛も世話も成た事を擧げて遣うといふ(藤)

イエノお恵み下さり升なら母へお渡下よりませ(文)年
 の往ね正直な氣質も恵む其金も廻る情の人力車〇車で
 急で行ッまや(藤)左様おれを旦那様(女)トレ途中まで
 御一所にト三人連立向へ這入味以前の四人出来り(豊)情
 の彼成少年の盛糸の弟で有たり(敬)親子の叔弟の詞を
 聞て私も恨の念が晴ました(豊)私も跡より見舞れ孝子の
 運不運ゆゑ運へ轉か運をなさん(敬)左様なれば父上
 様(文)娘諸共孫も来やれト向へはひる是よて道具居せ
 ころよ替る〇本舞臺正面比翼塚打返し情夫舞又替り左右
 の下軍打返し山吹の盛に替り下手柳の立木櫻の木も替り
 後一面打返し花屋敷中の遠見軒口に團子提灯を掲げし
 茶見世に成る下手槍込打返す舞臺盛と成る清元延壽太
 夫連中宜しく居並ぶ即ち大切上る名題左よ
 淨心寺の比翼塚 廻遊縁河竹 我〇市藏
 百花園の借夫舞 廻遊縁河竹 我〇市藏
 右より事宜しく有て目出たくまアす今板の是限り
 明治十四年五月十一日御届同日出版〇定價五錢

編輯兼出版人平民 山下金三郎
 東京麹町三丁目九番地假木局 諸藝新聞社